

「神のきわめて豊かな知恵」

エペソ人への手紙 3 : 9 - 11

November.20.2022

## エペソ人への手紙 3 : 9 - 11 (パウロ)

### Preface

前回エペソ書の御言葉を見た時から、大分間が空いてしまいましたが、これまで、今読みましたエペソ 3 : 9 にありますように、「キリストにある奥義の実現とは、どのようなものなのか」ということについて考えて参りました。

キリストにある奥義とは、やがて神の時が満ちた時、天にあるもの地にあるもの一切のものが、キリストにあって一つに集められること、そして、その究極の調和の中において最も大事な核となり、決して外すことの出来ない必要不可欠な神のわざが、罪の中に死んでいた人をキリストによって永遠の滅びから救い出すということでした。

この神の救いのわざこそが、「神のきわめて豊かな知恵」なんだと、エペソ書 3 : 10 でパウロは言います。

今朝は、この「神のきわめて豊かな知恵」という事に焦点を当てて、考えていきたいと思っております。

知恵という言葉は、知識とは意味合いが異なります。

知識が何かについて知ることに過ぎないとすれば、知恵は、その知識をいつでもどのように用いていくのかを見極めることの出来る資質、又は能力のことを言います。

知識のある人は人の数ほどいるかもしれませんが、知恵のある人となると、そう簡単にはいかないでしょう。

知恵があるということは、相当な境地にあると言えます。

その知恵という言葉を用いてパウロは、「神のきわめて豊かな知恵」と言い表します。

神に対して、私たち人間が知恵という言葉を用いるのは、ある意味失礼なことかもしれませんが、それでもなお、「神の知恵」と言う他ないがために、エペソ書の著者パウロはここで、「神の知恵」と表現します。

そして、その「神の知恵」が、人間の及ぶ知恵とは明らかに違うということを経験をもって言い表すために、「神のきわめて豊かな知恵」と表現するわけです。

では、どう意味で、「神のきわめて豊かな知恵」なのか？

第一コリントに行ってみたいと思います。

## Part One

### コリント人への手紙第一 1 : 24 (パウロ)

神の知恵は何であると言っていますか？

キリストです。

キリストこそ神の知恵であり、神の力です。

18節に行きますと、このことをこのように言います。

### コリント人への手紙第一 1 : 18 (パウロ)

つまり、イエス・キリストが十字架に架かれて成して下さった救い、また、その救いによって生まれた教会こそが、神の知恵の現れの絶頂であり、事件であるという事です。

この教会である私たち一人一人に及んだ救いと福音が、神様が成して下さった最高の作品であるという事を理解することほど、私たちにとって恵みとなることはございません。

これを理解することに、私たちの抱える多くの問題を解決する鍵が含まれているからです。

聖書は、私たちが罪人であることを教えてくれますが、この罪というのを容易に考えたり、侮ることは決してあってはなりません。

多分に人間的な言い方になってしまい、天地万物をお造りになった神様に対してもちょっと失礼な言い方になるかもしれませんが、神にとってしても、人の罪を赦し解決するというのは、そう容易いことではありませんでした。

聖書の語る福音を、“救い”、“恵み”、“信仰”、“信じたら赦されて天国に行く”というような所謂祝福の面ばかりを強調して、罪の深刻さに目を向けないことは、神のきわめて豊かな知恵を理解するという事からいつの間にか遠ざかってしまう恐れがあります。

救いは、罪があるからこそその救いですね。

罪がなかったら、救いは必要ありません。

やることやったからその報酬として受けるのが救いではなく、永遠の裁き、刑罰、滅びにある中から引き出して、引き出しただけでなく報酬まで授け、栄光の座へと就かせることが救いです。

ここに、神のきわめて豊かな知恵が現れるんです。

## Part Two

じゃあ、どういう意味できわめて豊かな知恵なのか？

私たちに及んだ救いが、愛と公義、愛と正義、愛と道義、愛と義を文句のつけようがない程に両立させているという点で、きわめて豊かな知恵なんです。

人は、神にとってあまりにも特別な存在で、他の動植物、惑星、物質等とは全くもって違う存在として造られました。

創世記を見ますと、他の被造物は神の言葉の命令によって造られましたが、人だけは、神の命じる言葉によって造られたのではなく、直接神ご自身の手で大地のちりをこねて形造り、いのちの息を吹き込んで、神のかたちにお造りになりました。

他のどの被造物とも明らかに一線を画する大切な存在として人をお造りになったがために、欲望と誘惑にハマって墮落してしまったからといって、手のちりを払い落して、「あ～あ～、仕方がない。無かったことにしよう」なんてことは是が非でも出来ません。

だからと言って、「そんな泥まみれ罪まみれになった人間を、よっしゃ、いっちょ大きな愛をもって包んであげようか」とは、そうは簡単に問屋が卸さないんです。

なぜならば、神は愛の神であると同時に、公義の神でもあるからです。

もし罪ある者を、あたかも罪が無いかのように扱い、その罪を神だからという特権を用いてもみ消すならば、もうそこには、公義も正義も道義も存在し得ません。

そこにあるのは、捏造と歪曲、権力乱用、職権乱用、不正行為しかありません。

この世と私たちと何ら変わることがなくなってしまう。

もし罪を裁かなかつたら、そこにはもうそれ以上公義は存在せず、神は義なる神ではなくなってしまう。

愛ゆえに、罪を見て見ぬふりをするならば義なる神ではなくなってしまう、かと言って、法に従って厳しく罰を与えるだけでは、愛の神でもありません。

でもやっぱり、そこは神様は神様です。

私たちの信じる唯一の創造主なる神様は、その豊かな愛を遂行し完成させながら、その公義をねじ曲げることもなさいませんでした。

愛と義の両立の極みが、御子イエス・キリストの十字架です。

三位一体なる神様の第二位格であられ、神の御姿なるお方であられ、神の子であり神ご自身であられるお方が、十字架に架かれることをもって公義も全うし、愛も全うされました。(ものすごくないですか?)

このことをパウロは、ローマ書でこう言います。

### ローマ人への手紙 5 : 7 - 9 (パウロ)

キリストの死に、神のきわめて豊かな知恵が現れるんです。

何者をもなし得ない愛と公義を、天地がひっくり返っても決してあり得ない、またあってもならない神ご自身が死なれるという事を通して、普通なら共存し

得ない二つを同時に全うされました。

そして、この神の愛と義の全うの結果、実りとして実ったのが、教会です。

イエス・キリストの十字架という神の知恵によって救いに与った一人一人のクリスチャンたち、キリストをかしらとする教会という存在を通して、神のきわめて豊かな知恵が具現化され、知らされていくわけです。

## Part Two

じゃあ誰に、この神のきわめて豊かな知恵を、私たち教会を通して知らせるのか？

ここが、今日の聖書箇所エペソ書 3 : 10 の面白いところです。

もう一度見てみます。

### エペソ人への手紙 3 : 10 (パウロ)

神のきわめて豊かな知恵を、教会を通して、誰に知らせると言っていますか？  
天上にある支配と権威にです。

天上にある支配と権威とは、天の御使いたちのことです。

天の御使いたちは、人がサタンに誘惑され罪人となってしまった悲劇について、神様のすぐ横で仕えていたわけですから、誰よりもその内情と深刻さを良く分かっていました。

罪人となってしまった当の本人たち、私たちなんかよりも、その由々しき事態を良く分かっていました。

元天使長で、天の御使いたちの 1 / 3 を引き連れて神にクーデターを起こしたサタンが、神に対する反逆罪ゆえに永遠の滅びを招いてしまった境遇から、何とか免れることは出来ないだろうかと探ったところ思いついた方法が、人を誘惑し、罪を犯させ、自分たちと同じような境遇に引き入れることだったという事を良く分かっていました。

そして先程も言いましたように、人は神にとって特別な存在であるがために、どんなに罪に陥ったとしても、決して放棄することはないという事をサタンどもは察して、墮落させた人間の救いのおこぼれに自分たちも与ろうという魂胆があったということも知っていました。

このサタンの魂胆と人間の罪、またサタンは裁き、人は救うという複雑に絡んだ天を揺るがすこの問題を、神様がどのように解いて行かれるのかを、神の近くで見ていた天の御使いたちでさえも、全然全くもってまるっきり、想像も出来なかったということなんです。

これは、私が作った作り話ではなく、聖書の記述が語っていることです。

### ペテロの手紙第一 1 : 12 (パウロ)

御使いたちも、神が成そうとしておられる福音がどのように成就するのかを見たいと願っています。

御使いたちでさえも、一体全体どうなっているのか、どのように神様が、救いと罪の問題を解いていかれるのかが、「見当もつかなかった」と言うのです。

### Part Three

では、神様はどこからことを始めなされたのか？

旧約聖書の時代からです。

天の御使いたちが見守っている中、神様は変なことをお始めになりました。

まず、アブラハムという人をお呼びになりました。

現在のイラク、カルデアのウルという所からアブラハムという人を呼び出して、生涯をカナンの地で過ごさせ、あっちこちに引き連れて行ったはものの、猫の額ほどの土地もくださらず、生涯をかけて与えた土地は墓地だけでした。

何を成さりたいのか、全くもって分かりません。

イサクが生まれ、ヤコブが生まれ、ヨセフが生まれました。

せつかく生まれたヨセフを今度は、エジプトに奴隷として売られるようにされました。

何を成さりたいのか分かりません。

飢饉となってエジプト以外の周辺国家に食べ物が一切なくなると、ヨセフの家族がエジプトに下っていき、そこで、家族皆で暮らすようになりました。

「ああ、神様はこんな風に導こうとしておられたのか！」と合点しそうになったその矢先、どうなりましたか？

エジプトで暮らし始めたすべてのイスラエル民族が、そこで400年もの間、奴隷となって過ごさなければならなくなりました。

一体全体、神様の意図がどこにあるのか、見当もつきません。

そして、モーセをお呼びになります。

「ああ！ モーセはエジプトの王子となって、イケてる人となった！」と思っただら、血気にはやって殺人を犯してしまい、ミディアンに逃げて行ってしまします。

そして、彼が80歳になるまで、神様はな～んにもなさいません。

天の御使いたちは、もどかしくて仕方がなかったことでしょう。

「神様、モーセはもう80歳になって、人生そろそろ終わりを迎えようとしています」と天使たちが思ったその時、神様は、今一度モーセをお呼びになりました。

そして、あの10の災いをエジプトに下し、200万人以上のイスラエル民族を奴隷の身分から導き出します。

「さすが、神様！」と思ったこれまた矢先、どうなりましたか？

荒野でみ～んな、死んでしまいました。

どのように、何を成さりたいのか、全くもって天使たちでさえも分かりません。

すると今度は、ヨシュアを立ちあがらせて、次世代の民たちを連れて、乳と蜜の流れる約束の地カナンの地に入って行きました。

「ついに来た～！」と思ったら、どうなりましたか？

士師記に記されている通り、その地で、他の民族に支配されるようなところを300年もの間通らされました。

そんな中、神様が誰をお立てになりましたか？

ダビデです。

ダビデをお立てになって、「ああ良かった。めでたし、めでたしとなるのかなあ」と思ったらどうなりましたか？

その息子ソロモンによって統一王国を成し、イスラエル史上最も繁栄を極める時代となりました、が、案の定やっぱり、ソロモンが死んだと同時に、国が南北に分断され血肉を争う戦いを何百年間もした後、南北国家共に跡形もなく滅びてしまいました。

バビロンに捕囚として捕まっていた後、それでも何とかかろうじて、故郷イスラエルに帰還して、これからまた新たに国を建てようとしたところ、今度は、ギリシアのアレキサンダー大王に征服されて、そこから解放されたかと思った矢先、ローマ帝国の属国となってしまいました。

そしてついに、神様は、誰もお送りになりましたか？

主イエス様をこの地にお送りになりました。

ここで、天の御使いたちは、「ラスボス登場！」と言わんばかりに、「もうこれで大丈夫だ！」と思ったことでしょう。

「アブラハムを、ヨセフを、ダビデを、エリヤを呼んでもダメだったけれども、今度ばかりは、格が違い過ぎる！ 三位一体なる神様の第二位格であられ、神の御姿なるお方であられ、神の子であり神ご自身であられるお方、神ご自身が直接現れなされた！ もうこれで大丈夫だ！」と思いましたが、父なる神は、御子なるイエス様をどこに送りましたか？

馬小屋です。泊まるビジネスホテルの1室もなく、馬小屋にお生まれなさいました。

それでも、御使いたちは狂喜乱舞しました。大いに期待しました。

なぜならば、格がそもそも違うからです。

それなのに、十字架に架かれ、死なれました。

すべての天の御使いが驚いたことでしょう。

天上には言葉で言い表すことの出来ない静寂と落胆と失望があったことでしょう。

「こんなことがあっていいのか！ 神であられる御子が死なれ、よみに下られるなんてことが有り得ることなのか！？」と、驚愕したことでしょう。

一方サタンは、大喜びです。

「神を殺せた！」と。

「これで我々は、永遠の刑罰と滅びから免れ、名誉回復が出来る！」とです。

## Part Four

しかし、しかしです。

全くもって希望が見えず、驚き呆れかえっていることが、一変して、センセーショナルな賛美へと変わります。

死をもって死を滅ぼし、死の権勢を握っているサタンどもの頭を打ち、墓の内からよみがえり、死を打ち破り、死に閉じ込められたすべての人々を引き上げて、救い出されました！

これこそ、神のきわめて驚くべき豊かな知恵です。

このことについて、天の御使いたちでさえも、驚いているんです。

だから黙示録を見ますと、天の御使いたちの驚愕の賛美が、そこら中に記録されています。

このことについて、聖書の中に沢山出てきます。

### テモテへの手紙第一 3 : 16 (パウロ)

御使いたちは、見ていました。

事の始めから終わりまで、一部始終、全部見ていました。

神のきわめて豊かな知恵が、彼ら御使いたちに知らされました。

そして私たちにも知らされ、神のきわめて豊かな知恵そのものであられるキリストによって生まれた教会も、驚愕するような歴史的歩みをここまで導かれてきました。

ローマ帝国の300年にも及ぶ大迫害によって、跡形もなく根こそぎ無くなるのかと思ったら、どうですか？

全世界中に、キリスト者であるという事が明るみに出ただけで即刻殺されてしまうような国々、地域、民族の中にも、教会が、クリスチャンたちがいます。

日本だってそうです。

豊臣秀吉、徳川家康の時代にあった大迫害でも、戦中の厳しい信仰弾圧に遭っても、脈々とここまで、キリストにある新たないのちが誕生し続けてきました。

### コリント人への手紙第一 4 : 9 (パウロ)

使徒たちの歩みは、御使いたちの見せ物でした。

どう意味で見せ物なのか？

嘲笑を浴びせるとか、馬鹿にするとか、見下すという意味での見せ物ではありません。

「なんとまあ神様の救いのわざの進め方は麗しく、豊かで、多様で、想像すらも、見当もつかないかのようにされるのだろうか！」という賛美の伴う聖なる驚きの目で、御使いたちは使徒たちを見ていました。

その端的な例がパウロです。

あの大伝道者ステパノがパウロに殺されてしまい、宣教のわざが滞ってしまうのかと思ったら、むしろ、その殺人者パウロを用いなさって、世界宣教を神様は始めなさいました。

そして、そのパウロと言ったら、一步進むごとにビンタを喰らわされるかのような歩みで、いつ倒れるか、いつ野垂れ死んでしまうのか、ハラハラするような思いで見ているけれども、不思議なことに、そんなパウロの歩みを通して、キリストを信じる者たちが次々と起こっていく。

(ここから私たちは、牧師や伝道者をそう簡単に裁いたり、見切りを付けたりしてはいけないという事も学べますよね。)

私たち一人一人の人生も、皆が皆、十人十色、千差万別、導かれ方も、置かれているところも違います。

でもその一人一人にある「神のきわめて豊かな知恵」に違いはありません。

だから、互いに尊重し合えるんです。

何よりもキリストを信じる者とされたならば、もう既に、神のきわめて豊かな知恵を身に帯びているということを理解していなければなりません。

### Conclusion

そして、私たちの恨みつらみ、悔しさ、苦々しさは、私たちの愚かさや馬鹿さ加減がその理由であって、神様に誠意がないとか、神様に力がないとかではないということを、私たちはすぐ見える場所に、どこかに刻んでおかなければならないでしょう。

先週見ました申命記に倣うならば、記章として額の上に置き、自分の手に結び付け、家の戸口の柱と門に書き記して置かなければなりません。

私たちは、神様がイエス・キリストを通して、愛と義を両立させながら罪の問題を解いていかれた神のきわめて豊かな知恵を知る者とされました。

これ以上の力もなく、これ以上の知恵も、天にも地にもどこを探しても存在しません。

神様は、旧約聖書の預言通りに、義において一切妥協することもなく、愛においても一切の制限を掛けることもなく、最大の難問を、義であられ愛であられる



神様らしく解いて行かれました。

私たちは、この義と愛の完璧な調和によって成された救いを頂いている者たちです。

私たちはつまらなく、くだらなく造られた者ではありません。

私たちを以前、天地万物をお造りになった時、大地のちりで神の手によって直接お造りになった時よりも、さらに尊く新しく生まれた者とされました。

キリストの流された血潮によって洗われ、キリストの聖なる衣を着せられ、新しく生まれた者たちが、私たちです。

神様のきわめて豊かな知恵と力によって、造られた者たちです。

何を心配する必要がありますか。

このことにのみ、私たちプライドを持って行きたいと思うんです。

お祈りいたしましょう。

祝祷：エペソ 1 : 3